

ら は た 訪 探 歴 史 44 其の クラブ

TAHARA
History Inquiry
Club

日本の近代化を支えた

田原のセメント産業

徳利窯は、燃焼効率や生産効率を高めるため導入された回転窯に取って代わり、製品出荷も渥美線の開通（大正11年）を見込み、生産が拡大されていきました。

そして昭和7年、三河セメント（株）は新たな挑戦を開始しました。アジアで初のレ波尔キソン（焼成装置付回転窯）の導入に成功し、田原の名を全国に知らしめたのです。

その後、昭和15年に経営は東洋産業（株）田原工場に替わり、昭和17



山口県小野田市に残る徳利窯

年には小野田セメント（株）に買収されました。昭和31年には第2号のレ波尔キソンの稼働が開始され、量産体制に対応するため、原材料は浦海岸に建設された荷揚げ施設の棧橋（200mもあった）からトラックで現在の吉胡貝塚駐車場にあった吉胡ステーションに運ばれ、さらにベルトコンベアで汐川を越え豊島町の工場に運搬されていました。このコンベアは全長644.5mもあり、当時日本で一番長いものでした。しかし、役目を終えたこれらの建造物は、昭和50年代に撤去されてしまいました。

その後、経営は昭和62年に三河小野田セメント（株）、平成6年に秩父小野田セメント（株）、

太平洋セメント（株）と替わり、昨年閉鎖された工場は今年の夏に取り壊され、田原のセメント製造は残念ながら終わりを告げました。

さて、セメント産業に先駆けて製造されていた石灰の窯は、山ノ神、白谷町、田原町五軒丁・蕨沢にありましたが、現在その痕跡を認めるのは白谷町にあるだけです。この石灰窯は、海に面した高低差のある急斜面を利用して築かれています。石灰岩の立派な石垣が2カ所突き出ており、その間に耐火レンガで煙突状に築かれた2基の窯があります。



白谷町の石灰窯跡

しかしこの窯は、まだ調査が不足していますので、地元で携わった方々にお話を伺う必要があります。

田原のセメント産業の遺構は、一世を風靡し田原の近代化に大きく貢献したにもかかわらず、ほとんど残っていませんが、その中において、徳利窯と白谷町の遺構は貴重なものと言えます。

田原市の礎の一つを築いたこれら産業の歴史は、今後私たちがより良い地域づくりを目指す上で、大いに学ぶ必要があります。今回は概要を記しましたが、さらなる研究を期待したいと思います。（増山）

【参考図書】田原区文化誌 蔵王 35

「セメント事業の始まり」河合敏氏

生涯学習課 23局 3531